



TITLE:

精神分析における4つのアポリア -  
他者、女、行為、症状-( Digest\_要  
約)

AUTHOR(S):

春木, 奈美子

---

CITATION:

春木, 奈美子. 精神分析における4つのアポリア -他者、女、行為、症状-  
. 京都大学, 2013, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2013-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k17844>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

精神分析における4つのアポリア  
——他者、女、行為、症状——

春木奈美子  
2013 年

本論文は精神分析において出会われる4つのアポリアをめぐって書かれたものである。問題となるのは、他者、女、行為、そして症状である。これらすべては実際の臨床から独自の問題意識により切り出されたものである。手続きとしては、こうした問題を文学作品に描かれた特殊な状況へと反射させ、さらにそれらを哲学・思想的枠組のなかへと送り返しつつ考察を進めていく。ときに実際の臨床事例を引くときも、フィクションを扱う場合と特別の区別は設けていない。臨床で実践されることと、文学で探求されるものの内奥には、言語活動における〈もの〉との不可能な交わりがあり、そこに姿を現すのが先にあげた4つのアポリアだからである。本論文の眼目は、こうした作業を通じて精神分析の新たな出口の可能性を展望することであった。以下に、各章で示しえたことをまとめておく。

第1章「歓待と他者」では、歓待という対峙的な事象のなかで〈他者〉に接近しようと試みた。日本の民話『鶴女房』、川端康成の『眠れる美女』、そして Pierre Klossowski の『歓待の掟』を、Lévinas と Derrida を参照しながら歓待の物語として読み解いた。それぞれ歓待の様式は全く異なるが、いずれの場合も歓待は素朴な意味での成功をみない。それは、〈他者〉の出現が同時に歓待の失敗を告げるためである。〈他者〉との融合が望めない以上、歓待は失敗を運命づけられている。しかしこの動きのなかにこそ、新たな主体の成立の条件を見出すことができた。

第2章「女たちの余白に」では、男性との関数では算出されない〈女〉、Lacan の言を借りれば「存在しない〈女〉」を、いくつかの事件・出来事のなかに発見することを試みた。考察の対象となるのは、Marguerite Duras が描く二人の女、Euripides のメデア、そして André Gide の妻 Madeleine である。Duras の小説に登場する〈女〉の不可解な行為のうちに、言語と引き替えに喪失した〈もの〉へ向かう不可能な欲望が、享楽として成就する瞬間を掬い上げた。また、こうした不可能な審級を出現させる〈女〉の行為として、メデアによる「子殺し」と Madeleine による「手紙の焼却」を構造的に読み解いた。こうした〈女〉のあり方は、破壊的ではありながらも、狂気の縁で主体を世界につなぎとめる積極的な面をあわせもつことを指摘した。

第3章「行動の条件としての行為」では、佯狂ハムレットが仕掛ける劇中劇における「演技」にはじまり、漁色家ドン・ジュアン「証書」たる女のリストにいたるまで、さまざまな「アクト」を取り上げながら、行為の審級を行動とは区別して定義することを試みた。これは同時に行動化と行為への移行という概念を分節化する作業でもあった。Lacan が（表象の）舞台からの落下と定義した「行為への移行」は、もちろん臨床においてある種の危険をはらむものであるが、それが舞台そのものを可能にした〈もの〉の

側への回帰であるとするれば、同時に主体の更新の可能性を秘めた開かれでもあることが示唆された。

第4章「固有名と症状」では、Freud が捉えた症状の二層性を、言語学のアポリアである「固有名」の問題系と重ねて検討することで、完全な消去は望めない〈症状〉のトポスに迫った。考察の対象としたのは、Dolto の二つの症例と、筆者が提示する「葬儀で署名できない女性の症例」である。固有名を欠いた主体、固有名に縛られた主体、彼らが一樣に示すのは、名指しという行為が主体の形成にいかに深く関わっているかということであった。本論文では、個人から切り離し可能とされている症候と個人と解きがたく結ばれた〈症状〉の関係を、言語学における記述説と反記述説の関係に重ねつつ考察することで、〈症状〉が担いえる名指しの機能を明らかにした。そうした「名指しとしての症状」は、もはや「主体の症状」ではなく、「主体が症状である」と言えるような存在様式、すなわち Lacan がサントームという用語によって指し示した、〈症状〉を通じて世界につながる主体のあり方であった。

第5章「ある事例に寄せて」では、ひとつの症例を詳細に吟味した。これは贈与や性そして行為や固有名の問題がポリフォニックに鳴り響くこの症例を通じて、第1章から第4章までの考察が具体的にどのように展開するのかという臨床的応用の作業でもあった。最後に、症候の消去に邁進するアプローチと区別して、個別的な主体の本質をなすものとしての〈症状〉に場所を与える精神分析の立場を明確にした。

以上の考察により、欠如の受入れからさらに一步踏み出した主体のあり方を提示し、精神分析の出口の新たな可能性を展望した。今後の課題は、こうした可能性が実際の臨床においてどのような射程をもつのかを明確にしていくことである。